

【研究ノート】

## 挿絵画家・川端龍子

\*岩城紀子

川端龍子（本名・昇太郎）は、大正・昭和期の画壇において、活躍した日本画家である。当初、雑誌や新聞の挿絵画家として活躍していた彼は、大正四年（一九一五）の第二回再興院展での初入選（「狐の径」）で、新進気鋭の画家として注目を集め、翌五年（一九一六）に出品した「霊泉由来」により樗牛賞を受賞、院友となった。彼の作風は、院展の主流であった「繊細巧緻」とは一線を画すもので、大胆な構図による大作を発表し、独特の存在感を示していた。大作主義への傾向を強めていった龍子は、やがて院展と袂を分かち、「会場芸術主義」を掲げ、昭和四年（一九二九）に自らの日本画団体「青龍社」を創設した。以後、昭和四十一年（一九六六）、八十一歳でこの世を去るまで、龍子は青龍社を活動の場として、時事性を強く反映した大作を発表し続けた。

平成十七年（二〇〇五）は、明治十八年（一八八五）に生まれた龍子の生誕一二〇年にあたる年であった。東京都江戸東京博物館では、これを記念して「生誕120年 川端龍子展」と題する回顧展を開催した。筆者はこの展覧会の担当として準備に携わったが、その過程で、従来あまり述べられることのなかった龍子の挿絵画家時代の活動について、若干の知見を得ることができた。本稿では、挿絵画家としての龍子の活動について、展覧会の準備の過程で行った調査

結果や、館蔵資料を中心に、彼が挿絵画家として活躍した『ハガキ文学』、『国民新聞』、『少女の友』の三誌を取り上げ、紹介していきたい。

### 『ハガキ文学』——挿絵画家としての出発——

雑誌『ハガキ文学』に龍子が関わった経緯について、まずは本人の弁から振り返ってみよう。

私は明治三十九年（一九〇六年）岡本武次の親戚にあたる林夏子を妻に迎えて、初めて世帯を持った。（中略）

初めて世帯を持った時、母は錢に金十円を私にくれた。その時の十円は貸間を探している間にほとんど使ってしまったが、幸に神田錦町三丁目の警察署前の煙草屋の二階を借りて、ささやかな新生活を始めることが出来た。この二階は二間続きの七畳半で、間代は月三円五十銭であった。（中略）ともかく雨露を凌ぐだけのでだては出来たものの、やがて三人となるべき生活の前途を思



図1 『ハガキ文学』 当館蔵

いながら、さてこれからなにによってパンを獲てゆくべきかの問題にいきなりぶつかって、思い悩まなければならなかった。私は、この煙草屋の二階で白馬会研究所以来の友人太田三郎君の親切な斡旋で、『ハガキ文学』の表紙を描いた。この表紙画の報酬、これは私が独立生活にはいつて最初に受けた勤労所得だったのである。

(川端龍子『画人生涯筆一管』 一九七二年 東出版)

明治三十九年(一九〇六)、二十一歳の龍子は遠縁にあたる林夏子を妻に迎え、新たな生活をはじめることになった。この結婚を機に、現実問題として生活のための収入を得る手段にせまられた龍子は、新聞や雑誌の挿絵を業とする

ようになった。冒頭に引用した龍子の自伝によると、その最初の仕事が雑誌『ハガキ文学』の「表紙画」であった。

『ハガキ文学』は、明治三十七年(一九〇四)十月に創刊された、会員制の月刊誌で、明治四十三(一九一〇)年まで全八十二冊が発行された(図1)。明治三十三年(一九〇〇)年に、私製はがきが認可されたことをきっかけに、かつての絵暦のような、好事家による絵葉書ブームが起こった。本誌は、こうした流行を背景に発刊された雑誌である。内容は、

絵葉書そのものの紹介に限らず、会員によって投稿された詩文や俳句、川柳など多岐にわたる。また、色刷りの美しい表紙や口絵など、雑誌の美観にも力点を置いていた。

龍子の自伝によれば、彼がこの『ハガキ文学』に関わるようになったのは、明治三十九年(一九〇六)からという。龍子の挿絵画家としての「デビュー」が、『ハガキ文学』における表紙画であるとする説は、彼自身の回顧談にもとづく自伝などの記述を根拠として、すでに定説となっている。ただし、実際にどのような表紙画や挿絵を描いていたのか、原資料となる『ハガキ文学』から探るといふことは、これまではなされていなかった。龍子は、『ハガキ文学』に挿絵を描き始めるとほぼ同時に、北沢楽天が主宰する有楽社に入社し、風刺漫画雑誌『東京バック』にも関わるようになる。また、その翌年には国民新聞社に入社し、多忙を極めていくことになる。こうしたことから、龍子が実質的に『ハガキ文学』の仕事に携わっていた期間は、明治三十九年(一九〇六)から明治四〇年(一九〇七)にかけての、ごく短い期間と考えるのが妥当であろう。幸い、当館にはこの『ハガキ文学』が、ほぼ揃って所蔵されている。そこで、龍子が同誌に関わっていたと考えられる明治三十九(一九〇四)年(一九〇六)に刊行された号に重点をおき、実際に龍子が誌面でどのような作品を発表していたのか、調査を行った。『ハガキ文学』では、表紙や口絵は誰の作品であるか、画家名が明記されており、誌面にカットとして挿入されている挿絵にも、原則として画家本人のサイン、落款などがあるため、作者の特定は比較的容易にできる。

そうした落款や署名を判断の基準とし、龍子が『ハガキ文学』に関わったと推定されうる期間に刊行された同誌の表紙や口絵、挿絵類を通過してみたところ、確実に龍子の作品と断定できるものは、次の八点であった。

- ①明治三十九年（一九〇六）七月一日発行 第3巻8号 17頁所載挿絵 「安房白浜」
- ②同 25頁所載挿絵 「大島」（図2）
- ③同 33頁所載挿絵 「閑静」（図3）
- ④同 41頁所載挿絵 「房州の海岸（館山港）」（図4）
- ⑤同 11頁所載挿絵 「房州の海岸（野鳥崎）」
- ⑥一九〇六（明治三十九）年八月一日発行 第3巻9号 口絵「明月」（図5）
- ⑦一九〇六（明治三十九）年十一月一日発行 第3巻12号 79頁所載 「浦の秋」
- ⑧同 83頁所載挿絵 「奈良の秋」

いずれも作品下に作者名として、龍子の本名である「川端昇太郎」の記名があり、後に雅号となる「龍子」の名は使われていない。し



図2 『ハガキ文学』  
第3巻8号<88139219>



図3 『ハガキ文学』  
第3巻8号<88139219>



図4 『ハガキ文学』  
第3巻8号<88139219>



図5 『ハガキ文学』  
第3巻9号<88139220>

かし、④の口絵、⑦⑧の挿絵には、「龍子」の由来となったタツノオトシゴを圖案化した落款を、すで見ることができるとは、龍子が自信で述べた表紙画であるが、これについては、『ハガキ文学』全巻に目を通したが、龍子が描いたものと判断できるものは、一点もなかった。『ハガキ文学』の場合、毎号表紙画が代わるというのではなく、配色を変えて一定期間同じデザインを使うことが多かった。従って、表紙画のデザインそのものの数も決して多くない。いずれも落款・署名で作者が特定できるものであり、その中に龍子のものはなかったのである。また、挿絵として掲載された龍子の作品も、掲載号は三冊にとどまり、全体でいうと八点と決して多いとは言えず、生活の支えとなるほどの収入になったとは考えにくい。たびたび龍子自身によつて語られた、『ハガキ文学』に関わる回顧談は、現物の資料から探った限りにおいては、必ずしも真実を伝えているものとは言えないようである。龍子自身は、第3巻第9号の巻頭を飾った「明月」と題された色刷りの口絵を、「表紙画」と表現したのではないだろうか。あるいは、自身の画家としての出発点を語るにあたり、多少の誇張を加えたのかもしれない。

い。いずれにせよ、長きにわたり、本人の自伝での記述を根拠に語られてきた、龍子と『ハガキ文学』との関わりについては、再考を加える必要があることだけは、確かと言えよう。

### 国民新聞社の時代

『ハガキ文学』で挿絵を描きはじめてと同じ頃、北沢楽天の『東京パック』や『東京ハービー』など、風刺漫画雑誌の挿絵も手がけるようになっていた龍子は、明治四十年（一九〇六）の末頃、国民新聞社に入社する。『国民新聞』は、明治二十三年（一八九〇）に徳富蘇峰によって創刊された日刊紙である。

龍子が国民新聞社に入社した経緯については、やはり本人の自伝に詳しい。

『東京ハービー』の廃刊後、私はしばらくの間実業の日本社の社員が兼業に経営していた、『少年パック』の編集を引き受けて一人でやっていたが、生活はそれでどうやらやってゆけたものの、なにか積極的にやってみたい意欲が強かったそのころの私には『少年パック』の仕事だけでは、とても満足させられなかった。そこで浪人者が第一に目をつけたのは新聞の挿絵であった。（中略）国民新聞社の挿絵担当者に欠員が生じたことを察して、私は同社の社会部長宛に直接手紙を出した。今考え出してみても、どんな風にも手紙を書いたのか思い出せないが、かなり長文の手紙で、それに挿絵風のものを描き添え、紹介者もなしにいきなり社会部

長の伊達源一郎氏へ宛てて送った。これこそ、いわゆる自己推薦というものであったのだ。どうせ握り潰されるだろうと思ひ、しかし、またひよっとすると……という期待もあって、返事を待っていると、その返事が来た。「会ってやるから出向いて来い」という文面で、ちよつと意外な感じだった。

（川端龍子『画人生涯筆一管』一九七二年、東出版）

早速国民新聞社に出向いた龍子は、編集局長の山川瑞三と面会しているが、龍子の熱意を買って採用することをその場で告げられ、即日入社が決まったという。すでに知己の間柄であった百穂と、ここで机を並べることになり、「不思議な因縁」だと龍子は述べている。いわば、龍子は自らを売り込んで、国民新聞社への入社を果たしたのである。このエピソードに見られる積極性と行動力は、龍子のパーソナリティを如実に示しているが、同時にいかにも「明治的」な人材登用の実態を伝えていて、興味深い。

さて、入社後の龍子は、新聞誌面の制作に関わる実に多彩な仕事をこなした。国民新聞社時代の龍子の活動として、特によく知られているのは、相撲の取組スケッチであり、このことについては、龍子自身も含め、関係者による多くの述懐が残されている。

それから角力のスケッチには毎場所欠かさず行かれた国技館になる前の所謂回院本場所といった時分、梅常陸全盛時代から、

これも随分永い期間健筆を続けられた。当時新聞の角力の絵といへば、多くは組手の型や勝負の単なる説明絵に過ぎなかつたが、君が一たびこの方面に手を染めらるゝと、その力士の風貌や骨格の特長から、砂のついた足裏を宙にした勝負の瞬間の活動まで手にとるやうに如実に写し得た技倆は、前後にないといつていゝと思ふ、そのおしまい頃は漸く凸版が応用されるやうになつたが、前期は、回向院がはねてから電車で社まで帰つてそれから画稿を木版師に渡すのであるから縮切までの彫りの時間も見て置かねばならぬ、かういつたやうな訳で、これも鈍根者であつては容易なことではないが、君には頭の中へ取組がチャンと入つてゐるのだから苦もなくやつて除ける余裕があつた。

(平福百穂「独創・魄力・健康」『アトリエ』6巻10号、一九二九年)

報道の手段として、写真がまだ普及の途上にあつたこの時代、事件の状況や、市井の様々な出来事をビジュアルに伝えようとすると、スケッチによる木版画がまだ主流であつた。

激しく立ち回り、一瞬にして決まる相撲の勝負を、目視によつて写生することは、「全神経を両力士の上へ集注して、その瞬間を見守り、あつと言ふ間に決つた取口の微妙極まる動態を、しっかりと記憶しなければならなかつた」ため、「如何にスケッチが好きだつた私にしても、初めのうちは、並大抵の辛苦ではなかつた」と、龍子自身、その難しさを述べている(川端龍子「わが画生活」一九五一年、大日本雄弁会講談社)。ただし、この経験によつて「物の動

態に対する観察に熟練を積み、その形容を、はつきりと記憶する力が出来た」と、後の大きな糧となつたこともまた述べている。

相撲のスケッチは、両国で場所が開かれている間に限られた仕事であつた。日常的には、伊達源一郎が次に述べるやうに、小さなカットを描いたり、写真の配置や文字・見出しの装飾といった、誌面のデザインレイアウトを手がけていた。

僕が龍子君と一緒に国民新聞に居た時、龍子君は主として意匠の方面を担当して居られた。即ちカットを書いたり、写真掲載の工夫をしたりするのが君の仕事であつた。無論そればかりではなかつた、沢山種々の絵も書かれた、スケッチや、漫画や相撲の絵や君の筆の働く範囲は随分広がつたが、主なる仕事は意匠に関する方面であつた。この方面で君位る成功した人は、恐らくは多くあるまい。満艦飾的に新聞を飾る時でも、記事の頭に小さな飾りをする時でも、拙劣な写真を巧妙に活用する時でも、君の手の触る、所、常に非常に気の利いた結果が顕はれた。広告の意匠なども、驚嘆すべき立派なものが出来た。六ヶ敷い広告心理なども、君は易く呑込んで、易く之れを筆に顕した。新聞心理でも、広告心理でも、君には造作なく会得されるもの、様に思はれた。驚くべく気の利いた人であると云ふのが、僕の君に対する第一の感じであつた。

(伊達源一郎「友人の一言」『中央美術』5巻2号、一九一九年二月)



図6 『国民新聞』明治42年（1909）  
1月19日付

伊達はさらに、こうした仕事を通じて、龍子が製版やインクなど印刷技術に関する知識を貪欲に得ようとしていたことも伝えてい  
る。後に龍子が、主宰した青龍社において、作品を描くだけではな  
く、展覧会のマネジメント、会場のレイアウトやパンフレット類の  
制作といった、実務的な部分も自ら主導したことは、この時期の経  
験を抜きには考えられないであろう。

国民新聞社に入社した当初は、ここまで述べてきたように、主に  
相撲のスケッチなどを中心に、手がけていたことは事実のようで、  
実際の紙面からもそれは確認できる（図6）。そもそも、新聞の  
「売り」となる人気小説の挿絵ならともかく、紙面を飾る小さなカ  
ットや文字の装飾を誰が行っていたかは、記名があるわけではな  
いので確認のしようがないのであるが、相撲のスケッチについては、

龍子本人の署名が見られるものがあり、自ら、及び関係者の述懐に  
あるとおり、継続的に担当していたようである。当時の第二面の花  
ともいえる連載小説の挿絵などを龍子が担当することはまだまれで  
あったようだ。むしろ、市井の事件・事故を、挿絵入りで伝える記  
事を一部担当していたと推測され、明治四十三年（一九一〇）八月  
十五日付の隅田川の大洪水の際の記事など、被害の状況を伝える挿  
絵の筆致は龍子のものである可能性が高い。挿絵とともにルポルタ  
ージュ風にとめられている記事中には、実際に現地に記者が赴い  
たとあり、龍子自らが取材を担当したとも考えられる。龍子の個性  
は、当時の新聞の売り上げをも左右し、読者の注目を集める小説の  
挿絵といった、挿絵画家としての花形の部分で発揮されるよりは、  
こうした実際の事件・事故に取材した話題をもとに、風刺的な視点  
を交えて描かれたカットとコラムで際立ったようである。そうして  
生まれたのが、「世はさまざま」と題された連載コラム記事であった。  
当初は「毎日の三面記事、つまり社会記事のうち、特殊なもの  
の中へ挿入する、漫画形式の小さな挿絵」（前掲『わが画生活』）と  
して掲載が始まったようであるが、やがて明治四十三年（一九一〇）  
九月頃より、「世はさまざま」というタイトルが付されるようになり、  
連日掲載されるようになった。龍子自身も後世、「この漫画入り社  
会記事は、当時の新聞としてはいはゆるトップを切ったやり方で、  
読者から相当の好評を受けた」と述べており、読者の人気を集めた  
のだろう。特に同僚であった平福の評価は、次のように高かった。

私は洋画の素養の足りない上に鈍根と来てるから挿画には随分手に了へないことが多かつたが、龍子君は其以前に東京パックにも筆を揮つてゐたし、そのころから此方面にかけては、すばらしい腕を見せてゐた。それに才氣縦横と来てるから、新聞社位の仕事は少しも苦になるやうなことはなかつたし、他の雑誌類へも手を伸ばしてゐた龍子君は社に於てもいろいろ忙はしい分担の他、日々の小出来事社会相といったもの、半段大、今の一段位の挿画を描いてゐた。これも君の絵によつて一寸特色のある読もの、一つであつた。女工が二人連れで夜逃げをしたそれには暗闇をゆく二人の白足袋だけが描いてある。三人連れが小便をして料に処せられたといふには、三門の砲車が無造作に……といった風に、極めて機智に富んだ、而もその描き振りが如何にも自由なものであつた、飄逸であつて、あくどいくすぐりがない。

(前掲 平福百穂「独創・魄力・健康」)

この連載記事は、明治四十四年(一九一〇)七月に新潮社から『漫画東京日記』と題して単行本化されたが、この出版を龍子に勧めたのが、実は平福であつた。刊行に際しては、当時国民新聞の文芸部長であつた高浜虚子が次のような序文を寄せている。

川端龍子君の筆になつた国民新聞紙上の挿画は、余は私に新聞界の珍品としてゐた。報告に過ぎぬ詰らぬ二三行の新聞記事が此挿画ある為、紙面の一隅に小さい気焰を吐いてゐるところに頗

る興味を覚えた。さうして他新聞でも之を真似たものがあつたが遂に龍子君のに及ぶものは無かつた。今又た其が纏つた書物になるに当り、其十月、十一月、十二月、三ヶ月間の校正刷を見るの機会を得た。以為く、此の書物も亦出版界の珍品であると。(中略)余は曾て新聞界の珍品として推称したものを、今は又無類の出版物として敢て世に推薦するの光榮を有す。

明治四十四年六月六日

京城客舎にて

虚子識

『漫画東京日記』は、縦十二・五センチ、横九・五センチという小さな本で、いわゆる袖珍本である。目次などは特にないのだが、一月から十二月までの十二章に分かれて構成されているのが、見出しとして付けられている「東京の夜」と題された十二枚の色刷の中心表紙からわかる(図7〜18)。各ページには、二つのエピソードと挿絵が掲載されている。これらはいずれも国民新聞に掲載された「世はさまく」から転載されたものであるが、忠実な再録ではなく、記事の内容や挿絵そのものにも異同が見られ、単行本化に際してあらたに書き下ろされたものと考えてよい。例えば次のような部分に顕著である。

明治四十三年(一九一〇)十月十八日付の国民新聞、「世はさまく」には、こんな記事が紹介されていた。



図10



図9



図8



図7



図14



図13



図12



図11

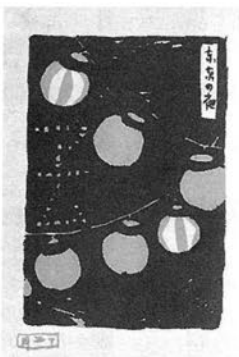


図18



図17



図16



図15

図7～図18 『漫画東京日記』〈87506014〉



電柱往生 十六日朝荏原郡入新井村旅人宿塩原方裏手の電柱に三十四歳位の縊死男ありし故警官出張したるも身許不明

こうした内容の記事に、電信柱から延びる電線にとまる二羽のカラスを描いた挿絵が添えられている(図19)。一方、これが『漫画東京日記』に再録された時には、次のように記述が改変されている。

電柱往生 荏原郡入新井村の電柱へ三十四五の男禰を以て縊死す地獄へは既に電報が届いて往生術の進歩に驚て居るべし

新聞掲載時に比べ、より風刺性の強い表現になっていることがよくわかるであろう。また、添えられた挿絵も、電柱にお経をあげる僧侶を描いたものと差し替えられている(図20)。さらに付け加える、新聞掲載当初にあったカラスの挿絵は、『漫画東京日記』中、

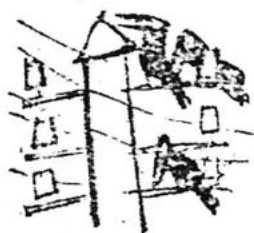


図19 『国民新聞』明治43年(1910) 10月18日付



図20 『漫画東京日記』39頁

電柱に登り修理作業をしていた電力会社の作業員が、感電して死亡したという、「宙ぶらり」というタイトルの別の記事の挿絵に使われている(図21)。

このように、記事内容の変更や、挿絵の差し替え、新たに判明した事実にもとづく改訂は、『漫画東京日記』に再録する際に、多くの部分で行なったようだ。新聞に掲載する段階では、やはり記事としての速報性が重視されるのは至極当然のことであり、これを一冊の本としてまとめるにあたって、より娯楽性の高い内容に改変しようとして試みたのであろう。実際の掲載日とは必ずしも一致しない月の章に割り当てられた記事も多く見られる。龍子は、新聞に掲載した時のそれぞれの記事から、エッセンスを取り出して、より風刺性の高い内容に書き換え、さらに歳時記風に十二月に割り振って一冊の本に仕立てたのである。



図21 『漫画東京日記』34頁

龍子にとって、この本は、単著として出版した最初の記念すべき著作であったが、出版を勧めた平福が「無理に勧めて『東京漫画日記』と名づけて新潮社から出版したが一向評判にもならず売れもしなかつた、当時は川端君にも甚だ濟まなかつたし、出版元へも気の毒であつた」(前掲 平福百穂「独創・魄力・健康」と嘆息したように、残念ながら営業的には成

功とは言えなかつたようだ。

少年・少女の夢を描く——実業之日本社時代——

明治四十一年（一九〇八）年、実業之日本社より、新しい少女向け雑誌『少女の友』が創刊された。初代主筆であった星野水裏（本名・久 一八七九〜一九二三）は、表紙や口絵、挿絵を担当する挿絵画家として、当時新進の洋画家であつた龍子を起用した。

私が少女雑誌「少女の友」の編輯をするやうになりましたのは明治四十一年でした。其時の第一巻第一号から私は川端君に挿絵をかって貰ひました。当時挿画は、川端君の其他の四五の画家にも依頼して居りましたが、川端君の挿画のかき方は、他の人のそれと大分異つて居りました。

洗馬君、寒光君などが、線の正しい濃淡の美しい、きちんとした日本画風の挿画をかき、夢二君があゝの線の大きい、自由自在にぬりまくつた西洋画風の挿画をかいてる一方に、川端君は始終意匠を凝らした、手のこんだ画をかいて居りました。

例へば、茲に同寸法の挿画があるとすると、第一図には人物を大きくして背景を小さくし、第二図には背景を大きくして人物を小さくするか、又は第一図の輪廓線と第二図の輪廓線とに異なつた装飾を付けるとか、其の内容にも外形にも、必ず意匠を凝らしてゐるところが他の人と異なつて居りました。

一 体川端君は、少女の友へ来るまでは、彼の一時非常な隆盛で

あつた「少年バック」をやつて居られたのです。ですから川端君の挿画には、喜怒哀楽の表情が、漫画的に極めて巧妙に現はれて居りました。従つて川端君の挿画は、此特殊なる漫画的趣味を加味して居た為に一層早く、他の挿画中より傑出することが出来たのであります。

（星野水裏「挿画と漫画と相撲画」『中央美術』5巻2号 一九一九年所収）

龍子は、同じく実業之日本社より出されていた『日本少年』の挿絵も担当することとなつた。この二誌は、明治末から大正にかけて、博文館が発行した『少女世界』『少年世界』をライバル誌として、少年少女の人気を競つたが、龍子はそれを代表する挿絵画家であつた。茨城県天心記念五浦美術館には、大正五年（一九一六）四月発行の9巻5号から、大正八年（一九一九）十二月発行12巻14号までの『少女の友』が通巻で所蔵されているが、これらの表紙はすべて龍子によつて描かれたものである。龍子の手になる美しい乙女の姿で表紙が飾られたこの雑誌を、多くの少女たちは胸をときめかせながら、手に取つたことであろう。

表紙や口絵以外にも、龍子は漫画のページを担当していた。9巻6号以降は、「やんちゃ娘」というタイトルで、「次女ちゃん」という少女を主人公とした見開き二頁にわたる連載を開始している。この「次女ちゃん」は、明治四十四年（一九一一）十二月に誕生し、連載開始当時四歳であつた龍子の次女・和歌子をモデルとしてい

た。9巻14号まで「やんちゃ娘」のタイトルであったこの連載は、翌年一年間、10巻1号から14号までは「お剛好振り」、さらにその翌年11巻1号から14巻までは「近所迷惑」とタイトルは変更したが、主人公はかわらず「次女ちゃん」であった。龍子の日常において起こった、次女・和歌子によるいたずらや失敗談を、ほのぼのと描いた作品で、龍子の父親としてのやわらかな視線を感じ取ることができ（図22）。星野水裏はこの連載について、ちよつとしたエピソードを紹介している。

世間の多くの人達は、川端君の漫画を見て、只これ天才のひらめきだとのみ思つて、其蔭にひそんでる苦心の痕を知らないらしいが、それに就いて是処に一つのお話があります。

或時川端君は、いくら考へても漫画の趣向が浮んで来ないので、

少女の友では知らぬ者のない、愛嬢の「次女ちゃん」を連れて、前の田圃へ散歩に出掛け、いろんな質問を出しては次女ちゃんを答解を求めたり、一寸畦道から押してやらうとして其動作の変化を見たり、いろいろに苦心をして遂ひ半日を費したといふ話があるのです。

（前掲 星野「挿画と漫画と相撲画」）

実際、龍子も漫画のネタには大分苦労していたようだ。ついには、その苦労をネタに、こんな作品も著している（図23）。

図22 『少女の友』10巻12号33頁  
茨城県天心記念五浦美術館蔵

図23 『少女の友』10巻12号27頁  
茨城県天心記念五浦美術館蔵

一、お悩振りも種が尽きて、考へ出すものは古いものばかり、「黴の生えるやうなものばかりだ。」とムシヤクシヤしてゐる内にいつかうとうとと昼寝してしまつた。

二、黴の生えるやうなものばかりと聞いて次女さん、「きつと暑いからよ。さうださうだ宜い事がある!!!」と机の上の画稿をこつそり持ち出した。

三、何をするかと見てゐると、台所の冷蔵庫の内へ押し込んでピシヤリ。「さあ、これで腐ることはない。」

四、夕食の支度に、女中が冷蔵庫を開けてビツクリ。「旦那様、原稿を冷すのでございますか。」

〔『少女の友』10巻10号、一九一七年九月〕

大正五年（一九一六）四月三十日、有楽座において第五回目となる『少女の友』の愛読者大会が盛大に開催された。この大会の様子を、星野水裏は第9巻7号の同誌誌上で詳細に報告しているが、その中で、「（会場の）階下の入口から左へ曲つた壁間には、川端龍子君が特に此日の為に書いてくれた「やんちや娘の今朝の失敗」という漫画」が飾られ、「頗る皆さんの感興をひいたらしうございまして」と記すとともに、「当日懸けた川端龍子君の漫画」として写真で紹介もしている（図24）。「次女ちゃん」は、『少女の友』の愛読者にとって、親しみやすい人気のキャラクターであった。

だが、実業之日本社で龍子が携わつたさまざまな仕事のなかで、何よりも読者を魅了し、人気を得ていたのは、『少女の友』と『日

本少年』の二誌の正月号に、目玉付録として登場した絵双六であつた。

当時の少年・少女雑誌では、正月号の目玉企画として、絵双六が付録となることが主流であつた。雑誌の内容とともに、付録が売れ行きを左右したともいえ、各社競つて人気画家が描く絵双六を企画した。龍子は、二誌の挿絵を担当していた約十年の間、ほぼ毎年の正月号付録双六を担当した。それぞれ、『少女の友』では主筆の星野水裏と、『日本少年』でも同じく主筆の有本芳水（本名・飲之助一八八六〜一九七六）とコンビを組み、作品を描いている。ちなみに、大正二年（一九一三）の『日本少年』正月号は二十一万部、大正八年（一九一九）の正月号は三十五万部の発行部数であつた、とも言われ、いかに多くの少年たちが龍子描くところの絵双六を手にしたか、その人気ぶりを推し量ることができよう。明治三十年代か

図24 『少女の友』9巻7号41頁  
茨城県天心記念五浦美術館蔵

ら四十年代に生まれた世代にとつては、龍子の名は、こうした雑誌を通じて深く記憶されたことであろう。

この両誌で龍子が付録として制作した絵双六は、筆者の確認したかぎりであるが、別表（本稿未掲載）のとおり十四点あり、そのうち七点が『少女の友』、六点が『日本少年』である。残りの一点は、同じく実業の日本社から刊行されていた、婦人向けの雑誌『婦人世界』の付録である。

各社が目玉として競っていただけに、誌面での宣伝にも毎年力が入っていた。たとえば大正五年（一九一六）の年末号である第9巻14号の巻末には、「新年号予告」と題する見開き二ページの広告記事が掲載されており、その中で次号の付録を筆頭に置き、次のように大々的に宣伝している。

新年大附録

花鳥双六

星野水裏案 川端龍子画

本誌の双六は毎年々々第一等の評判を取つて居りますが、此の名譽を毎年々々続けて行かうとしますは中々並大抵の苦心ではございませぬ。幸ひ水裏と龍子とは共に大森の郊外に住んで居りますので、二人は毎日々々行つたり来たり、打ち合せに打ち合せを重ねて、漸くこの花鳥双六をこしらへました。

花鳥双六は花屋敷に振出して、巧みに四季の花と鳥とを取り合はせ、最後に小禽園で上りとなるのです。その美しいこと、愛らし

いこと、上品なこと、実に天下一品、今年も亦双六中の女王であらうとの評判です。是非皆様の御賞玩を願ひます（口絵4）。

予告宣伝のための記事であるので、かなり誇大気味に書かれていると考えなければならない。だが、ここに記されているとおり、確かに双六の原案には水裏の意向が強く反映していたようで、そのことは「私がその頃一番沢山描いてゐた『少女の友』の主筆だった星野水裏氏が、至極真面目な人で、雑誌は単に娯楽的に読ませるだけではないけない、読ませた上に少女達の思想や生活を正しく導くものでなければならぬ、といふ、いはゞ一種の指導理念を堅く把持してゐた人だつたから、私の挿絵の描き方に就いても、いつも相当にやかましい註文をつけてゐた」（前掲『わが画生活』）と語る龍子の回顧談からも想像することができる。

もう一点、『少女の友』の付録双六の中で、筆者が特に出色の出来であると思うものを紹介しておこう。

大附録

友子の空想旅行双六

星野水裏案

川端龍子画

『アツ、又空想旅行！』

この頁を開けて見て皆さんは、吃度大きな声で斯う仰しやるでせう。さうです、また空想旅行です。然し今度は私達がするのは

ありません。実は私達が秋の増刊で空想旅行をしました処が、それが大変な評判であつたので、友子は自分にもどうか空想旅行をさしてくれと申すのです。

何がさて可愛い、友子の事ですから、私達は早速それを許してやりました。其友子の旅行記がこの新年号の附録となつて出る「友子の空想旅行双六」なのです。

友子は最初飛行機に乗つて出掛けました。途中大雨に逢つて雲の中へ落ちました。それから虹の橋を渡つて天上界へ昇りました。天上界ではいろんな歓待を受けて、面白を楽しく旅行しました。それから更に海へ下りました。此処でもいろいろ愉快な思ひをして、遂に鯨の潮に吹上げられて芽出度「上りの国」へと到着いたしました。

処で此の「上りの国」といふのは、それは実に奇想天外、空前絶後、古今未曾有といふよい国なのです。若し皆さんが御覧になつたら、吃度涎の川が大洪水を起して、沿岸の人畜悉く溺れて死ぬといふ騒ぎになるでせう。

ですから此「上りの国」の事だけでも申上げられません。それが双六出るまでのお楽しみです。どうか何誰も是非々々おもつめなすつて下さいまし。

『少女の友』11巻14号、一九一八年十二月（口絵5）

原案者である水裏は、龍子の双六について、「今年も少女の友の新年号の双六をかいて貰ひましたが、出来ましたからとのお知らせ

で行つて見ますと、川端君は其原稿の外に捨てようとしても居るのか、何か沢山のドーサ紙を切つた束を持つて居ます。『何ですか』と尋ねましたら、「双六の書きしくじりです」と言つて笑はれた。何枚あるかとき、ましたら五六十枚あるんださうです。さうすると川端君は、あの双六をかくに一つの駒に五枚も書きしくじりをしたといふ事がわかります。」（前掲 星野「挿画と漫画と相撲画」と述べている。この中に登場する「あの双六」が、すなわち「友子の空想旅行双六」のことである。

このエピソードからわかるように龍子は一点の双六の制作のために、試作を重ね、オリジナリティ溢れる作品を生み出すのに相当な苦勞を重ねたようである。確かに、龍子が描いたこれらの絵双六は、当時、ライバル誌の附録として出されたものに比べても、個性的なものが多かつた。特に、画面全体を大胆に使い、鳥瞰で描いた構図や、細部にいたるまで神経の行き届いた描写など、後の龍子の作品を彷彿とさせる特徴を有している。『日本少年』の第8巻1号（大正二年・一九一三）の附録であつた「冒険小説雙六」は、まさにこうした特徴が顕著に現れた一点であろう（口絵6）。画面中央に描かれた飛行機は、後年「大陸策連作」の一として発表された大作「香炉峰」を思い起こさせる。翌号の通信欄に、「一月号の大附録『冒険小説雙六』は何といふ奇抜なそして面白いものでせう。僕はすつかり気に入つてしまつた。」という多くの少年読者の声を紹介するとともに、記者が「特に新年附録の『冒険小説双六』は至ると

ころ評判がよく、萬朝報などは「新年の各雑誌の大附録としては日本少年の冒險小説双六が圧巻である。」とさえ書きました。もつて本誌の大附録が如何に面白かつたかが分かりませう。」と自画自賛するのも、ある程度納得できる。こうした読者の反応は、『少女の友』でも同様に取り上げており、件の「花鳥双六」や「友子の空想旅行双六」についても、沢山の愛読者の声を紹介している。

▲新年号はまあ何といふ綺麗なのでせう。花鳥双六もよく出来ました。今年も矢張女王でございませう。

▲殊に水裏先生の御意匠になつた花鳥双六、拝見いたすや電氣にうたれたやうに感じました。

▲先生、花鳥双六ほんとに気に入つてしまひました。寒い晩などお炬燵の上に拵けて、ドイツと見つけて居りますと、いつの間にか、お火鉢を真中に挟んでお頭をつき合せて御相談していらつしやる水裏先生と龍子先生とのお姿に交つてしまひますの。両先生のお骨折を深く感謝致します。

▲双六といへば大抵、赤や黄や紫などの派手な色をベタベタ附けたのが多うございますのに、まあ友子さん（読者の少女たちは、『少女の友』をこのように呼んでいた・筆者註）の花鳥双六はなんて可愛らしい気持の好い双六でせう。

（『少女の友』10巻2号、一九一七年一月）

▲友子さんのいらした「上りの国」つてほんとによい所でござ

いますのね。私も行きたうございますこと。ねえ先生、胃病の薬はたくさん用意しておきますから友子さんにお願ひして見てくださいいな。

▲一生懸命神に念じて、サイを振つてごらんさい。きつと「上りの国」へ行けますよ。（先生）

▲先生、私は前からおこしが好きですの。ところが今度空想旅行雙六の御馳走に、おこしが袋にぎつしり入つてゐるのがあつたでせう。それを見るとのどがグウグウいつて今でもやまないのて困つてゐます。お願ひですから至急送つて下さいまし。

▲そんな贅沢をおつしやつてはいけません。あなた自身で取りにお出でなさい。（先生）

（『少女の友』12巻2号、一九一九年二月）

自身の家庭生活で起こつた出来事を話題に、親しみやすく描かれた漫画や美しい双六は、読者である少女たちを魅了していた。「まあ、龍子先生が男子ですつて。私は又女の方とばかり思つて居ましたの。」（『少女の友』11巻10号、一九一八年九月）。こんな投書からも、龍子と読者との交流の一端をうかがい知ることが出来る。実業之日本社でのこうした活躍を見る限り、伊藤が「龍子君は、新聞雑誌の絵書きとしては、珍しく成功した人であつた。国民新聞社でも実業之日本社でも、大に重宝がられて居た。君の周囲の人々は皆な、君が一生の事業として、此の領分を守つて行くであらうと思つて居た。」（前掲 伊藤源一郎「友人の一言」と述べる通り、人

気挿絵画家としての地位は揺るぎないものであったと考えてよいであろう。しかし、龍子自身がここに安住する気がなかったことは、この後の彼のたどった道程が物語っている。

おわりに

挿絵の仕事と並行して、本画の作品制作に取り組んでいた龍子は、大正六年（一九一七）九月、再興第四回院展に出品した「神戦の巻」によって、日本美術院同人に推挙された。

川端龍子君は、今回美術院の同人になりました。私達は龍子君の為に大に此名譽を祝賀したいと思つて居ります。

〔少女の友〕第10巻12号「編輯便り」 一九一七年十月

主筆である水裏によって、このように誌面で告知されたことに対して、龍子ファンの読者から多くの祝辞が届いたようである。龍子は早速次号で感謝の意を表している。

諸嬢へ御礼

川端龍子

私の書きました「神戦の巻」が入選しました事や、又今回美術院の同人になりましたに就いて、少女の友の愛読者諸嬢から、通信やらお手紙やらで沢山のお祝ひ状を頂きました。厚く御礼申し上げます。私はこれからも、怠らず益々努めるつもりです。略儀なが

ら紙上を借りて御礼まで。

〔少女の友〕10巻13号 一九一七年十一月

同人となったことをきっかけに、龍子は本画家としての活動に重点を移しはじめた。『少女の友』の誌面でも、龍子の作品は徐々に少なくなっていく。次女・和歌子をキャラクターとしたシリーズ漫画も、大正七年（一九一八）十二月の11巻14号を最後に連載を終え、大正八年の12巻以降は表紙のみを担当し、それも大正十年（一九二一）の14巻以降は降板している。また、毎年人気を博していた、正月号の目玉付録であった双六も、12巻1号ではその作者の座を明石精一に譲っている。創刊の時から関わり、雑誌としての草創期を、挿絵画家として支えた龍子であったが、大正十年頃を境に、この分野から距離を置くこととなった。龍子の出版メディアにおける活躍を評価する人は少なからずおり、本画家としての成功を喜ぶと同時に、新聞・雑誌界から彼が去っていくことを惜しむ声もまた多かった。「川端君みたいに挿画描きの中から所謂本画描きに出世（マデ）した人が出ると、兎角若い挿画々家の腰がそわそわして挿画に落付かぬので困る」（岡本一平「川端龍子の夫人」『中央美術』5巻2号、一九一九年一月）という、岡本一平のこの言葉は、龍子の才能を認めたまうえでの、友人への皮肉をこめた餞の言葉として印象に残るものである。

※本稿の執筆にあたり、「生誕120年 川端龍子展」にご協力いただ



挿絵画家・川端龍子

	作品名	制作年	考案者名	掲載誌・号数	所 蔵
1	およばれ双六	1911(明治44)年		『少女の友』 第4巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
2	花咲き双六	1912(明治45)年		『少女の友』 第5巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
3	冒険小説双六	1913(大正2)年	有本芳水	『日本少年』 第8巻1号付録	東京都江戸東京博物館蔵
4	買ひ物双六 一名 デパートメントストア	1914(大正3)年	星野水裏	『少女の友』 第7巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
5	自働車競走双六	1914(大正3)年	有本芳水	『日本少年』 第9巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
6	青島占領双六	1915(大正4)年	有本芳水	『日本少年』 第10巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
7	龍宮土産 初夢双六	1916(大正5)年	星野水裏	『少女の友』 第9巻1号付録	東京都江戸東京博物館蔵
8	少年運動双六	1916(大正5)年	有本芳水	『日本少年』 第11巻1号付録	東京都江戸東京博物館蔵
9	家庭教育双六	1916(大正5)年		『婦人世界』 第10巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
10	少年軍艦双六	1917(大正6)年	有本芳水	『日本少年』 第12巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
11	花鳥双六	1917(大正6)年	星野水裏	『少女の友』 第10巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
12	特製スタンプ附日本 名所双六	1918(大正7)年	星野水裏	『少女の友』 第11巻1号	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
13	少年未来旅行双六	1918(大正7)年	有本芳水	『日本少年』 第13巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料
14	友子の空想旅行双六	1919(大正8)年	星野水裏	『少女の友』 第12巻1号付録	学習院大学史料館寄託 小西四郎収集 双六資料

いた多くの関係者並びに関係機関のご教示を得た。特に、茨城県  
天心記念五浦美術館の副主任学芸員・稲葉睦子氏には、資料閲覧  
について便宜を図っていただき、また挿絵画家時代の龍子につい  
て多くのご教示をいただいた。記して謝意を表したい。